51-3 ～ 51-12

琵琶機関紙　京絃　第二六一号　京絃社

薩摩琵琶とその周辺(二)

「英文武士道」に採り上げた琵琶＝新渡戸稲造博士の生立ち＝薩摩の排仏毀釈の実態＝クラーク学長と門下

（東京）　坂本錦道

薩摩琵琶というものを世界に紹介した本として「英文武士道」がある、この本は明治三十二年の刊行、著者は新渡戸稲造農法学博士（一八六二―一九三三）であるが、篤実なる基督者である博士が、如何なる理由でこの本の中に薩摩琵琶を採り上げたか、以下博士の略歴とその背景にも触れながら筆を進める。

博士は原敬や後藤新平と共に東北南部藩の盛岡に生れた、家柄は家老格であった。明治の初期に笈を東京に負い東京予備門を経て札幌農学校（今日の北大）に学んだ人。そもそもこの農学校の開校に当って当時開拓使長官黒田清隆中将は、学長を米国に於て教育者として令名のあるクラーク博士を招聘した。博士は着任と同時に黒田長官に面接した時に、「私の教育の信條として、学生の人格形成は聖書によって始めてなし得る精神教育である」とその抱負を開陳した。云うなれば日本新政府直轄の官立学校のミッション化である。関係者の間ではこれは大変な事だとばかりに猛烈な反対運動が起った、それでなくとも明治元年三月新政府神祇官より神仏判然令と云うものが発布されている、それは排仏毀釈といって江戸時代より何事によらず仏教中心の政策を一擲して、新政策の遂行をしている最中である、茲で一寸この問題に少し触れる。

これより前幕末の王政維新の思想を盛り上げた中心には、神武復古を理想とした平田篤胤やその一門の後醍院真柱等、多くの国学者が復古神道を唱えて廃仏論が天下を風靡している時で、当時薩摩藩に於ては二十八代斉彬もこの支持者で、洋学を基礎とする進歩的開国論者であり、西郷隆盛や大久保利道等下級武士を抜擢している、そして新しい国防の見地より寺院の梵鐘を全部鋳潰し（時報鐘を除く）、新兵器を製造せんとする大計画を目論見ていたが、傑物斉彬は惜しくも五十才（明治を遡る九年前）で他界、やがて新政府の出現、神道一本化を計る神祇局の開設、それと呼応するが如く日本各地で仏像、仏具、仏画の破壊が容捨もなく行われていた。

薩摩藩は王政復古運動にも長州と組んで先頭に起ち、また排仏の指導的役割も果たしているが、特に注目に価するのは薩摩の排仏毀釈の実行は徹底的に之を実行した。たとえば藩主忠義の奥方の葬儀を神式によって執行し、藩内全部に中元、盂蘭盆の禁止、藩内千七百に及ぶ寺院は廃寺とし、由緒ある名刹二十六寺を残すのみとなった。又寺僧の処置は三分の一が兵士に還俗、残った寺僧に一日二合五勺の配給米を給すと云う徹底的の廃仏をやってのけた。

どうも鹿児島県人は、その昔より薩摩隼人の名称のある通り、勇猛心もさる事ながら一本気の気質を持っている。かの義弘（日新公の孫）を見ても合戦の鬼と称され、五十二度の戦に殿様自ら戦の陣頭に槍を構えて馬を駆らすと云う位だから将卒も黙って見ていられない、薩兵の強さは此辺にあり薩人の死を見る、帰するが如きは敢えて珍らしい事でない。また征韓論に敗れた西郷を観る隼人は無條件で之を擁護すると云う激情や、過去に起きた藩内の事件一つ一つを見ても、薩摩気質と云うものがそれに反映して如実に之を物語っている。

さて話はだいぶ横道に外れたが、こうした排仏毀釈の大事件の余燼いまだ収まらぬ時に、何を好んで今まで禁制のキリシタンバテレンを学校のなかに入れねばならぬか、開拓庁の中は議論が沸騰してその撤回を申入れたが、

名手一堂に会し盛会であった。小栗栖ー田中井殃水　川中島ー青沼紅舟　大原御幸ー高田瑩水　坂崎出羽守ー中島旭穂　うつぼ猿ー水藤五郎　木村重成ー平野鉦水　粟津ケ原ー林田旭城　桜井の駅ー大塚岳峻　北斉幻想曲ー小沢錦弥　須磨の与市ー中村旭園　亀山上皇ー遠藤鶴東　屋島の誉ー座間燮水　花の宿ー広瀬翠江　彰義隊ー平井春嶺　静ー石井桑水　衣川ー山元旭錦　熊谷連生坊ー都錦穂　小敦盛、栗原雨竹　西郷隆盛ー松崎洲陵　大森彦七盛長ー押田旭窃　風林火山ー伊集院牙城　壇の浦ー田中旭嶺　義士の討入ー村本桜柳　菅公ー八東一峰。

一水会京都支部例会

寒気遠のき和らぐ一月二十五日(日)昼一時から東山仁王門の本妙寺で新春初寄りの会を開いた。九十四才長寿の渡辺洛水氏をはじめ古谷竟水、早川畿水その他会員七名(欠席二名)何れも元気に溢れまさに春風一時に来るの感で、それぞれ独自の個性ある初声を発揮して新春の気分を盛り上げた。小栗栖ー田中歡水送別ー早川畿水　吉野懐古ー渡辺洛水　春日野ー馬場鴨水　山科の別れー牧南水　本能寺ー木下皇水　竜の口ー古谷竟水。終って一同乾盃、歓談、琵琶発展への実のある実現を誓いつゝ六時散会した。

武絃会。一水会多摩支部合同研修会

二月一日(日)昼一時小金井市福祉会館に於て開催。城山ー小山羽水　乃木将軍ー富田晴蹟　紅葉狩ー石井效水　伊豆の御難ー中村修水　宮本武蔵ー杉山旗水　城山ー清水源城　村上喜剣ー伊藤磐水　義士討入ー村木桜柳　春の調べー菊地甘水　佐渡の夕暮ー伊集院皷城　乞食瓢六ー坂本錦道。六時閉会。

京都琵琶協会二月定例茶話会

二月八日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅で開催。馬場鴨水、戸倉旭嶺、戸田旭公、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、山本旭英、牧南水、古谷竟水、荒木旭媛、木下皇水、水内燮水、平井春嶺、植村翼水の各会員並に大阪田中鯉水氏や函家で琵琶楽の理解者伊達氏が来遊、四月十一日協会春の演奏会に各自の演奏曲目選定と出演順の抽籤を行い併せて三協議のあと水内女史（湖水乗切）外六氏の研修演奏が展開され夕刻近くの料亭「きぬ」で小宴を開き和気靄々裡に八時前散会した。

ラヂオNHK・FM琵琶放送

十二月十八日(木)夕五時、名残りの桜ー筑前金子旭昭、別れの盃ー錦心流山口速水両氏。一月二十二日(木)夕五時、大原御幸ー錦心流高田瑩水氏、外に詩吟、和歌朗詠四氏。一月二十三日(金)夕五時、湖水乗切ー錦心流二反田岳水氏（オーデション合格者）二月十九日(木)夕五時、木原綾子女史ー錦琵琶屋島の誉。外に詩吟四氏。

島田春水（本名島田詮三郎）氏

中の処旧臘二十六日逝去、享年七十一。大正七年故山口錦堂師に入門し皆伝教師として奥伝者数十名を輩出した錦心流の功労者、昭和三十年総伝。謹みて御冥福を祈る。

美登里理水（本名大村静子）女史

昨年来療養中の処一月十二日癌のため逝去、享年六十二。大阪琵琶同好会婦人部長として活躍された功労者。謹みて御冥福を祈る（大阪市東淀川区東淡路町三丁目三七）

藤原英水（本名松本多津子）女史

昨年来入院中の処二月四日南大阪病院にて肝臓癌のため逝去、享年七十一。大正十年故丸山巴水入院加療師に入門、故橘愛水氏に嫁し同氏亡きあと一水会大阪支部に所属し傍ら「女流さつき会」を主宰、大阪琵琶界の功労者。昭和三十二年総伝。謹みて御冥福を祈る。（喪主大阪市西成区天下茶屋三ノ九七松本良雄氏）

（予　告）

○…京都琵琶協会三月定例茶話会　三月七日(日)昼一時会員矢吹旭美津女史宅

○…竜吟同友会三月例会　三月二十八日(日)昼一時東京新宿洲鳳会館（鈴木流泉氏主宰）。

○…晴風会演奏会　三月二十七日(土)夕五時東京杉並区高円寺会館（浅野晴風氏主宰）。

あとがき

梅一輪一輪ほどの暖かさ●暦の上の立春は二月五日であるが春の「定義」は気象学的には三月ー五月、天文学の立場では春分から夏至までと仲々やゝこしい●兎に角厳冬豪雪の今年の冬も三月の声を聞けばむつかしい理屈は抜きにしてようやく春が来たという実感が湧いて来る●冬眠の琵琶界もこれからしばらくが所謂〝わが世の春〟で各地での演奏会なども活発に展開されよう、存分にご活躍を期待する●演奏会など済んだ模様の報道も大事だがこれから開催される演奏会や催し物、ラヂオ放送などの本紙「予告欄」をもっともっと充実したい●事の大小に拘らず事前にお知らせ下さって同好者を喜こばせて欲しい●特によろしくお願い申上げる。

〒569　昭和五十一年三月一日発行（非売品）
編集者　植村翼
発行所　京絃社
高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六(八五)六〇五一番

クラークも頑固一徹の教育者で容易に之に服さざるどころか、それが駄目なら一体何をもって学生の人格形成教育をするのか、一片の道徳論や倫理と云う学問などで人を作る事は到底出来るものでない、人の魂に触れるキリスト教を併せて教育する以外その効果は期し難いと云う反論を展開して、自分のこの方針が受け入れられないなら私は直ちに帰米するという強硬さで、流石の黒田長官側も切角赴任して来たクラーク先生をこのまゝむざむざ帰米さすのも愚の骨頂、何とか方法がないものかと種々協議の結果茲に折衷案を考え出した。教会堂を学園内に設けて礼拝するのは学生の自由意志に委せるということでやっと解決して、新しい学長のもとで農学校が開始され、之が新日本に於ける最高の学校形態で明治九年のことである。かの有名なクラークの言として「青年よ大志を抱け」の言葉と共に、今日札幌市内にその旧校舎の一部が時計台の時報と共に昔日を物語っている。このクラーク博士の門より新渡戸稲造、元北大総長佐藤昌介、宮部金吾、内村鑑三、志賀重昂、頭本元貞、渡瀬庄三郎等新日本文化の基礎的役割を果された錚々なる人材が輩出している。

茲でもう一つ付け加えたい話は、このクラークの門下で基督教界に於て、世界的大説教者として令名のあった内村鑑三先生は、大正の中期に斯く叫んだ。

ーげに日本ほど至れり尽くせりとも言うべき倫理教育を受けている国民はない、欧米の識者は明かに之を認めている、然るにその高度の教育を受けている者の実体は如何、今や国を挙げて腐敗と不義と荒濫の濁水に溺れんとするー云々

と痛論された。その時点から既に五十五年の歳月が流れ、教育の浸透した今日の日本を見よ、法治国に全く見られない不義と退廃は幾何級数的に増大、智能犯の氾濫を何と見るか、全国に九百以上に及ぶ大学と短大、学生総数は二百十数万人、毎年卒業する学生は三十七万八千人と云う、人は之を駅弁大学と云い、石を投げれば必ず大学生に当るという位いである、まさに恐るべき大智能群である、明治の初年にクラークの言として「人間の智能を如何に啓発しても、教養良識どころか人格陶冶に何の関係もない」この言葉を味うべきである。

更に最近の学校騒動、内ゲバ事件、浅間山荘事件、爆破事件等々何れも凶暴なる殺人を伴い、教職員の破廉恥犯や一連の汚職犯は、この空洞化された高学歴化社会に発生する不道徳極まる現象である。いまこの事象の裏を返せば今日の学校教育の中に何が欠けているか判然とする。それは恰かもセンターの狂った旋盤機に如何に名技工が腕を振ったとて、出来上る製品は依然として規格の外れたオシヤカしか出来ない、要は旋盤機のセンターの狂いの矯正から取掛らねばならない、ここに奈良女子大の岡潔教授は「今日の学校教育の中に、道義と云うかんじんなものを教えないで手を抜いていることと、この教育界の病弊を一掃するため日教組を徹底的に追放するよりほかに道はない」と断言されている（続く）

安珍・清姫伝説の鐘

辻　旭　城

醍醐天皇の延長六年（九二八年）八月、奥州白河の若僧安珍が伊勢の国熊野詣での途中、紀州牟婁郡真砂の庄司清次の家に泊り、同家の娘清姫に懸想されたが、逃れて道成寺にひそんだ。後に追って来た清姫は、恋の執念に蛇体となって日高川を渡り、鐘の中に隠れていた安珍を情炎によって焼き殺した……。

紀勢本線御坊駅で降りてバスで十分、すぐ見えるのが六十二段の石段と仁王寺である。こゝ道成寺は云うまでもなく安珍・清姫の伝説で知られているところ。

伝説の道成寺を有名にしたのは何と云っても琵琶、歌舞伎、謡曲、長唄などで作られた安珍・清姫の物語であろう。岩をも徹す女の一念の恐ろしさにスリルを添え、恋の哀歓を情緒をこめて説く、話上手な寺僧の説明を聞くとなかなか興味深い。では模写の絵巻物を手に、聞いた一席を紹介しよう。

昔、奥州白河のハンサム青年僧安珍が、熊野詣での途中泊った〝民宿〟の未亡人（清姫）に口説（くど）かれる。修業中の安珍は、一時逃がれに帰途のデートを約束したが違約した。そのため清姫は悶々の思いが嵩じてその

〝こころ〟が蛇になった。

逃げた安珍は道成寺に馳けこみ鐘の中に隠れる。蛇になった清姫は執念深く追い続けて鐘の回りを七巻半、竜頭をくわえて紅蓮の焔を吹きつけ、とうとう僧を焼き殺してしまう。

――当世風なロマンスにアレンジされた寺僧の名調子はつづく――。

〽花の外には松ばかり　暮れそめて鐘や響くらん　鐘に恨みは数々ござる……。

絢爛豪華な歌舞伎の舞台に現われた道成寺は、桜と釣鐘とを取り合せて美事なもの。

一名調子の寺僧は、最後に声を低くして、「物語に出てくる鐘は、京都の妙満寺にあるのです。」と、恨みがましく云った。勿論、伝説の中で焼かれた鐘の二代目である。どうしてそれが京都の寺にあるのか？

鞍馬電車で木野駅下車、すぐ踏切を渡って南へ行くと左は雑木の丘、右の畑にはハウス栽培のビニールが銀灰色を見せる、やがて長い土塀越しにインドの寺院を思わせる仏舎利塔がのぞく、顕本法華宗総本山妙満寺である。

この妙満寺に問題の〝道成寺の鐘〟が送りこまれたのは、現在の京都寺町二條に移る頃、南北朝時代の正平十四年（一三五九年）、道成寺で二代目の鐘が作られたが、この鐘は清姫の怨念がたゝるのか縁起が悪く、いくら撞いても少しも鳴らないし村内には悪病が流行する、遂にはすっかり邪魔物扱いにされて裏山に捨てられてしまった。

貴船近くの山林に幾星霜か眠っていた鐘に〝再雇用〟のチャンスが巡って来た、それは戦国時代に於ける戦さの陣太鼓の代用にするのだという。

この事について文献には種々の説があるが、妙満寺に伝わる話では、天正年間秀吉の紀州根来寺征伐に従った津和野城主仙石権兵衛がその再雇用主だった。権兵衛はタネまきならぬ鐘の堀起こしをはじめ、戦乱のあと車につんで山から引張って来た。所が寺の前まで来ると、車が止まって如何にしても動かない、そこで妙満寺二十五世の貫主日般上人が、経を唱えてその呪縛を解いた。仙石権兵衛の母方の菩提寺が法華宗だった関係もあって、鐘は妙満寺に寄進された。鐘もやっと安住の場所に治まり安堵したのか、それ以後は撞くたびに美音を発したという。

道成寺では毎年四月二十七、八の両日、鐘供養の会式が行われ、妙満寺でも毎年四月十二日に安珍・清姫の慰霊法要会式があるが、この日には道成寺の住職も参列される由。

〝道成寺〟を演ずる芸能人も、この鐘の前で芸道精進を祈願することが多い。現在この鐘は仏舎利塔の中に安置されている。山門を入った左側にある梵鐘は別のものである。

鐘と共にインドのブッタガヤ大塔を模して、昭和四十八年に建立された仏舎利塔は妙満寺自慢のものだが、もう一つ見逃せないのは雪の庭であろう、この庭は清水寺成就院の月の庭、今はなくなった北野成就院の花の庭と合わせて、雪月花の京洛三名園と称せられた。

狂醉亭漫録第百十八

景清雑考

古谷竟水

現在京都清水のほとり二年坂の北角に古い建物の阿古屋茶屋が残っている。

今は内部外部を改装して茶店か、類似の飲食店になっているが、此の建物は寿永の昔、平家の侍悪七兵衛景清が、愛人である天下の美女阿古屋を住まわせた由緒ある建物で、去る大戦中の昭和十六七年頃、私の勤務会社の重役であった大阪の富豪岸本吉左衛門氏が、二萬円程の貸金の抵当に此の土地建物を取ったので、建物の時価調査を依頼され、親しく実地調査をした事があった。

建物の細部は後世修覆されたものであるが主要部分の柱や梁は創建当時の儘で、当時は鉋が未だ無かった時代で、木材の表面は全部手斧で削られてその跡が歴然と残り古色蒼然たるもので、正に寿永の古建築に相違ないも

平井洲誠

紘界や初富士衣まとふべし
澄天に四紘ひゞけと三ケ日
五十春一の紘さへまゝならず

ので、時価は兎に角、歴史的遺物としては骨董価値あり、評価し難いものであった。

さて景清とは如何なる人物か、正史には殆ど記載なく、俗書俗説には種々取沙汰され、結局伝説の人で、古書によると、

㈠　伝説の景清。平家物語、源平盛衰記等に現われる異色の人物。平家の遺臣で、通称上総七郎兵衛、俗に悪七兵衛と呼ばれて体軀長大剛勇無比、寿永年中平維盛に従って源義仲を攻め、また平知盛について源行家を破り屋島の合戦には美尾屋十郎と鏑引の逸話を残している。

平家が西海に没落の際、景清が惜しからぬ命を全うしたのは、頼朝兄弟に恨みの一矢を報いんと誓ったためとある。建久六年三月十三日頼朝大仏供養の少し以前に、景清は何と感じてか鎌倉へ降参したが、和田義盛に預けると放埒無礼の振舞のみ多くて手に了えず、更に八田知家の手に移すと、大仏供養の日を指折り数えつつ湯水を絶って、三月七日に死んだという。この景清に種々の俗説を附会して脚色された、能、操浄瑠璃、歌舞伎などの戯曲は数知れない。

㈡　謡曲の景清。五流ともに行われる四番目物、世阿弥の作。トモ従者、ツレ人丸、シテ悪七兵衛景清、ワキ里人。

鎌倉亀ケ江谷の長に預けられた景清の娘人丸は、源氏に憎まれて日向の国宮崎に流されている父を慕ってはるばると尋ねて来る。世に背き草の庵にあさましくやつれ盲いた景清は恥ぢて容易に名のらなかったが、里人のとりなしでやうやう親子対面し、八島合戦の物語をして聞かせ、その声を形見に、亡き跡の弔いを頼んで、はかなき縁の親子の別れを告げる。謡曲の景清には他に大仏供養がある。

琵琶曲景清は、永田錦心宗家の名作であるが、内容は謡曲景清を要約したものである。

㈢　景清狂言の種々。主として右の謡曲に拠って多くの浄瑠璃及び歌舞伎に脚色された景清狂言があり、就中、操浄瑠璃では近松の出世景清を初め、壇浦兜軍記、娘景清八島日記、（俗に盲景清）等あり、歌舞伎には、窄破の景清、大仏供養の景清、茶の湯の景清、解脱の景清、めぐみの景清、（別名岩戸の景清）琵琶の景清、鏑引の景清、二人景清、（俗清）に身替景清）非人景清、いきほひ景清、及び所作の景清、等種々の趣向がある。

㈣　歌舞伎十八番の景清。江戸歌舞伎に入った景清は、荒事として市川団十郎代々の当り芸となり、二代目以来の伝統を七代目団十郎が歌舞伎十八番の一と銘打って天保十三年三月河原崎座で上演した。窄破りの景清である。其後殆ど絶えていたのを明治四十一年十一月歌舞伎座で市川高麗蔵（後の七世松本幸四郎）のために竹柴金作の補作、常盤津連中で復活された。其内容は、

平家の遺臣景清は源氏に捕われて鎌倉の土窄に入れられたが、源家の粟は食まず。景清が所在を知る平家の重宝青山の琵琶と青葉の笛の詮議のため、秩父庄司重忠と岩永左衛門が出張して、景清を窄から引出して吟味するが、白状しないので娘人丸と阿古屋を召捕って枷に拷問すると、景清は怒髪天をついて、重忠の情けも効なく窄はもろくも破られる、という筋立である。

次に景清の妻阿古屋の事を脚色した芝居に壇浦兜軍記があるので少々解説すると、

壇浦兜軍記。文耕堂、長谷川千四合作、操浄瑠璃として享保十七年九月九日より竹本座上演、平家に孤忠をつくす景清は叔父大日坊を奈良坂で殺して悪七兵衛と呼ばれる。

頼朝が上洛の途中根の井館に立ち寄るを、景清は仇せんと大工になって入り込む。同じく左官に身をやつして入りこんだ箕尾谷（之は八島に於ける鏑引の相手である）に組み伏せられて、鎌倉の土窄に入れられる。景清は窄を破って逃げたので、その行方詮議のため景清が馴染の遊君阿古屋は、堀川御所の白洲に召出された。

名君秩父庄司重忠は、阿古屋に、三味線、琴、胡弓の三曲を奏でさせると、糸竹の調は整然として一糸も乱れないので、心に邪のない証拠、阿古屋が景清の行方を知らぬというは、偽りでないと許される、という筋。

之は近松門左衛門の、出世景清による処多く、殊に有名な阿古屋の琴責め、はその、小野姫拷問、の換骨奪胎と云われる。

また阿古屋の兄井庭十蔵が、景清と瓜二つの容貌なので、景清の身代りに立たうとする第二段の辻講釈小屋の場は、後の歌舞伎の、

二人景清、の粉本となった。

初めて歌舞伎で演じられたのは享保十八年三月三日よりの大阪角座の興行で、引続いて原作を潤色したものが種々行われている。

さて序に大方の誤解を避ける為、悪七兵衛の悪について一言すると、之は悪いという意味でなく、強いという意味である。悪源大義平、西塔の悪僧武蔵坊弁慶も同様である。

大阪夏の陣（一）

山川流水

大阪冬の陣の和議成立で、大阪城は外壕から二の丸までつぶされてしまったが、淀君や大野修理治長らは平和になったと喜んで、お茶の会や宴会を開いて楽しんでいた。が、これも暫くの間のことで、戦闘には負けたと思っていない将兵に論功行賞はなく、城内は急募した浪人達を合わせて人数は激増したのに豊臣の領地は元のままで勢力圏は狭くなり、財源が少ないため実のある褒美も出せず、新旧の将士に不平不満の声が広がって、遂に「徳川を討つべし」の空気が城内に充満した。

城内の大将株たちは浪人募集にかゝっていた。大野治長の弟大野主馬治房は主戦派の一人で、「大日本史料」によると大津の代官鈴木左馬助は治房の親友で、徳川方に在りながら冬の陣の時も、大阪城内に矢文で包囲部隊の様子を知らせていたほどで、治房は今度の募兵計画に左馬助を通じて、小幡勘兵衛景憲を自分の幕僚に招きたいと申し入れた。

小幡勘兵衛は、冬の陣には関東勢の前田築前守利長の陣中にあって、真田丸攻撃に大奮戦をしたが元来は軍学者であった。大野治房からの入城招請状を受取ると、これを伏見城代松平隠岐守定勝に見せ、徳川方に忠義振りを示した。定勝は京都所司代板倉伊賀守勝重と謀って、小幡を治房の招きに応じた如く元和元年（一六一五）二月二十六日入城させた。任務はスパイである。

早速大野治房部隊の幕僚会議に出席して同二十八日口実を以て伏見に出かけ、城内の模様を板倉勝重に知らせると家康に急報、折返し家康から〝小幡は引続き城内に戻って①京都、伏見の焼討ちをさせぬよう、②大津瀬田の橋を焼き落とさせぬよう、③五月迄は出撃させぬよう、以上につき全力をあげよ〟との指令が届いた。

この密命を受けて小幡は三月一日再び大阪に戻り、治房に京、伏見の模様について虚無の報告をすると、治房は大いに喜び平野町の戦災を免れた町家を小幡の住宅にきめ、四月からの月給は米三十石分とし、取りあえずは毎日小幡の家来のために弁当百人前を届けた。

十三日治房邸での幕僚会議で、新宮行朝は速やかに京都に攻め入ることを提議し一同賛成したが、小幡景憲のみは反対し「家康は歴戦の智将で、京都攻撃をすれば家康は直ちに出陣して来るだろう。今はこちらから出撃せずに天下の名城大阪城に立てこもり数年の内のチャンスを見るのが得策であろう」と云えば、行朝は「家康が奥州の大名までを動員するには五十日を要する、それまでに京を占領し瀬の橋を焼きおとして東海道を遮断すれば関東勢の西下は困難となる」。続いて岡部大学も「京都出陣は所司代板倉勝重を追出すためで、さもなくば伏見城代松平定勝を攻めよう」と提案し、治房も賛成したので小幡はあわてて「飛んでもない、伏見城は堅固で容易に破れない、その間に彦根の井伊掃部頭直孝が救援に来る、彼は智勇にすぐれた大名である」。この一言で議決は後日に譲って解散した。

十七日、京都妙心寺長老から治房に、小幡勘兵衛は東軍のスパイで、二月二十八日伏見に帰り、城内の様子を板倉勝重や松平定勝に報告しているのを定勝の家臣が漏らしたから心を許してはいけない、と注意して来たので治房は驚いて、俄かに勘兵衛宅の周囲を警戒させ、五時の夕食弁当配給も停止した、事露見を察知した小幡は三月二十七日未明脱走して伏見城に入り、大阪方の追跡も遂に及ばなかった。

その後家康は小幡勘兵衛を旗本に加え、大阪落城後千五百石使番に取立てた。「一万石以上の功労があったのに」という者もいたが、小幡の弁舌で夏合戦に勝ったとあっては、家康の価値が下がる、と云う事のようだった。

明治初期の史学者五弓雪窓の「事実文編」によれば、小幡勘兵衛景憲は甲州（山梨県）の武田家に仕えた家柄で、信玄の兵法をきわめた後も各地の名ある兵法学者を訪ね奥儀に達した軍学者で、各大名の家臣で入門する者二千人、山鹿素行なども門人で、小幡の名声は全国に鳴り響いたという。

我が道を行く

六十五年（三五）

西郷天風

この館林には薩摩琵琶竹生会時代からの親友中井がおり、或日久しぶりでやって来たので例の小料理店（これは雪輪町団地に近い関係で我々グループが常時行きつけの店）に案内した、彼も私同様酒は不調法だったが、こんな時一本位は御愛矯とばかり牛のすき焼を添えて談笑のさ中に、彼突然声をひそめて曰く〝君近頃此処で何かあったのか〟〝いゝや別に何もなかったが：どうして其様なことを〟〝いゝや何かあったろう〟と私の顔をのぞく。しかし私には合点がゆかぬ、すると彼は尚も語をつぎ〝だって今僕達が階段を中途迄昇った時、女中達が吾々に眼をそゝぎ乍らクスクス笑っていたではないか〟と。だが私には何も思い当たることがない、ところが、いざ食事となった時一人の女中が大きな「飯ビツ」を抱えて座るなり突然云いだした。

〝今日は大丈夫ですよ、之に一杯ありますから、おとゝいは、もう一杯とお茶碗を出されたらどうしよう、と内心狼狽していたのです、あなたあの時五杯召しあがったでしょう〟

これで客の疑いは晴れたが、あの大茶碗に五杯とは我ながら驚いた、思えばその日は一度も食事をとらず、仕事に夢中だったのであろう、そうした日は稀ではなかったから。

さてこの中井君と初めての出逢いを回顧すれば、明治の末期私が館林町に琵琶教授を初めた当時、お弟子達と共に冨貴座裏の空地を町内会から借受け、約一週間に亘って草刈や地ならし、それも石炭ガラを敷つめ、やがてテニスコートのネット張に取かゝった時、自転車で参加を申込まれたのが初めてで、この中井君の存在によって館林町に於ける「テニス熱」はいちゞるしく昂まった。

彼は慶応義塾中等科在学中からの庭球の選手であり、亦撞球に至ってはその持数四百五十と云うベテランで、全国学生間に於ける代表選手でもあった。その時代、学校などの体育運動競技と云えば野球か庭球ぐらいのもので、野球程大がかりでないだけに庭球が全盛を極めており、中井選手を擁する我が竹生会が天狗クラブの名のもとに、近郷近在の学校教職員グループと試合の際の如き、附近の老若男女が観覧席を埋める有様で、常に中井選手の好技が人気を沸騰させていた。

亦彼の撞球は、技神に入るの噂高く、数尠ない田舎町の撞球場では相手をする者もなく、手持不沙汰の彼は私を佐野町の撞球場迄つれ出す始末で、この館林にも一台ぐらい何とかならぬものかなあ、とかこちおる折柄偶然にも好機到来した。

館林駅に隣接する敷地に小規模乍ら正田一族による製粉工場があり、従業員達の間で保健の見地から運動場建設の議題起り、私の兄の下宿に同居する社員から相談を受けた。庭球場設備等についての意見だったがそれは附近の学校で事足りる問題であり、庭球場には相当の敷地を要するが、撞球ならテニスコートの半分の敷地で充分であり、それに碁将棋の為の座敷を加えた一棟を建れば一挙両得と云うので衆議一決し、日ならずして其撞球場は完成を見た、それには中井選手の指導が前提であったのは勿論、その落成祝賀会には時の貴族院議員正田貞一郎社長初め重役達も臨席し、中井選手の妙技に拍手喝采は鳴り止なかった。

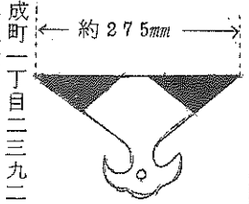
爾来重役と従業員との交流の場となったのは当然で、数年後には宇都宮に第一工場、水戸に第二工場と云う風に、工場を建設すると九州の果てにまで及び、其数十余ケ所、正に日本一の製粉業に発展し、日清製粉株式会社となって斯界に君臨するに至った、その基礎の片鱗を担ったとも云えるこの撞球場建設は、今も尚快よき思い出の一つである。

斯の如く足利館林在住の頃は、私の生涯に於ける最も充実した楽しい時代だったが、それも永くは続かなかった。

あれは確か大正九年十二月の暮れも押つまった二十日すぎだった、さすが盛況を謳歌しつゝあった織業界に突然大不況の嵐が上得意の関西から吹き巻くって来た、それも異常な大好況に酔いしれているさ中に突如として襲来した為に織業家の倒産数知れず、之に依存する図案家も当然失業の渕に立たされた。しかし来春ともなれば回復の日も来るだろう、それ迄休暇でも取ったつもりで保養につとめようと呑気に構えて見たものゝ、図案を描く用もなければ机に向う時間も不用となって見れば琵琶を抱くにも気乗せず、弟子達も巷に吹きまくる不況の風に無関心ではおられぬのであろう、稽古を休む者も多く、五人の連中のみ相変らず顔を見せたが、やがて不況の風にも馴れ気分も落付を見せた頃、魚屋の伜が意外な事を申込んで来た。この伜の伯母に当る元花柳界出身の者が常盤津の稽古場を開いたから応援を頼むと云うのであった、無職になやむ折とて一同こぞって入門することゝなり、私には性格に相応しい曲として「将門」を押付られ、「恋はくせ者世の人の」から稽古を受けることになった。

薩摩琵琶の新しい撥の開発

合成樹脂の台に、絃や腹板に接する部分に良質のツゲ材を特殊技術で接合した新型撥がこのたび弾法の名手鈴木流泉氏によって完成し、数年前に製作の全合成樹脂製撥の欠点とされた弾奏中の所謂「かたい感じ」を完全に除去することが出来たという優秀なものが開発された。値段は八千円。五挺以上まとめて購入の場合は送料不要。詳細は埼玉県越谷市大成町一丁目二三九二鈴木流泉氏（〒三四三）へ照会されるとよい。



三位研修同志会の新年例会

一月十五日(木)昼一時三鷹市上連雀公会堂で開催され伊集院鼓城氏の年頭の辞（本年度琵琶界人心刷新に就て）に続いて門琵琶伴流謡切五弾法連弾｜錦幽・鼓城・錦道　湖水乗切｜伊藤友彦　乃木将軍｜富田晴萠　威海衛｜坂本錦道　菅公｜八束一峰　千代の春｜中村晃憲　武蔵野｜軽部岳瑞　吉野落(下)｜西村暠峻　雲竜｜伊集院鼓城　雪晴れ｜伊藤磐水　葉児｜篠宮擾水、詩吟　城山外｜田戸桜丸　録音彰義隊｜伊集院一城　以上研修を終って新年宴会に移り歓談放歌などで盛会裡に散会した。尚当日書道家新屋敷春雷、城山会員根本岳邦両氏から祝電が寄せられた。又新屋敷先生揮毫色紙「雲龍」を伊集院鼓城氏に「龍」を三位会に寄贈された。

晴風会新春演奏会

一月十七日(土)十一時｜十六時半東京杉並区高円寺会館（五〇〇円）　菅公｜須山　桜井の駅｜菅野　五條橋｜岩崎　城山｜大田尾　白虎隊｜諸遊清風　仁科信盛｜本橋錦颯　羽衣｜竹内　武蔵野｜坂入晴峰　羅生門(下)｜野口蟾水　弁内侍(上)｜福島脹水　坂崎出羽守｜青木晴城　静｜大関英子　舟弁慶(下)｜加藤錦陽　異国の丘｜杉山雅俊　茨木(下)｜高田瑩水　石童丸｜山下晴楓　薩摩守｜望月啞江　噫八甲田山｜会長浅野晴風。外に詩吟三題。

大阪琵琶同好会の新年宴会

一月十七日(土)昼一時から奈良市の簡易保養センターで開かれしばし不景気風を忘れるという盛会であった。橘中佐｜矢野旭信　扇の的｜坂根　吉野山懐古｜辻旭城　姫百合の塔｜石橋旭嶺　秋風故郷の山｜寺尾旭吉栄　伊豆の御難｜中山鳳水　粟津ケ原｜天津八千代　羅生門｜光旭仙。外に詩吟、剣舞、日舞など宴中に披露され本年の活躍を誓って散会した。

日本芸術琵琶柏会一月例会

一月十八日(日)昼一時東京西新宿七丁目の柏ビル六階で開催。伴流謡切第六、七弾法｜山崎錦幽　坂崎出羽守｜青木晴城　高砂｜高田瑩水　漢詩二題｜日原錦楼　鉢の木｜軽部岳瑞　須磨の敦盛｜杉山旗水　黒田武士｜山崎錦幽　平家物語朗読｜雨宮映月　名残りの緒琴｜若宮旭登　西郷隆盛｜長谷川錦舟、以上研修の後小宴を開いて八時散会した。

大津労音例会で琵琶公演

大津労働者音楽協議会今年の例会は一月二十二日から市民会館で開始され当日「新春邦楽の夕」で（絃）松岡旭岡（歌）伊藤旭暢お二人の筑前琵琶「湖水渡り」が公開され万雷の拍手を受けた。

新春琵琶楽名流大会

一月二十三日(金)昼十一時東京日本橋三越劇場、東京新聞・日本琵琶楽協会共催。東西の